

鶴見俊輔と

「日本のアイデンティティ」の諸問題

Shunsuke TSURUMI's Contribution
to "The Japanese Own Identity"

Tsuneyuki KIMURA

木村 倫幸

近代国家という制度に関してさまざまな問題が出てきているとはいえず、現在において国家とこれが持つ権力は、なお圧倒的な力を有している。それはわれわれの日常生活の隅々にまで影響・支配を及ぼしており、われわれは、国家との関係を抜きにしては現実には何事をもなし得ない状況に置かれていると言っても過言ではない。現にわれわれは、この国家の国民というかたまりとして扱われている。

しかしそれにもかかわらず、あるいはそれであるからこそ、われわれは、この国家と国民というかたまりに一色に染められてしまうことに、何かしら馴染めないズレのようなものを感じ、そしてこのズレのような感じが日常的に絶えず起こってくることも認めなければならない。この違和感をどのように説明すればよいのであろうか。それは恐らくわれわれの側に、近代国家という制度にはめ込まれ、国民という色に塗りつぶされる側面のみでは覆いきれないものが、存在しているからであろうと思われる。すなわち、国家——国民という軸とは別に、これに並行して、あるいはこれを包み込むかたちの軸と言えるものが存在していて、そしてこの後者の軸が、前者の近代的枠組みの前提あるいは基底となっていることであろう。ただし後者は、人間社会が社会として成立以来の軸であるからである。ところが近代国家成立後、前者の軸により、後者はこれに吸収されてしまったかのような感があり、われわれは、あたかも国家が「アイデンティティ」を持ち、すべての「公的なもの」を代表しているかのような印象を持っているのである。しかし近年われわれは、そのみには収まらない後者の軸がさまざまな局面で噴出しているのを見、その反面これを強圧的に抑え込もうとする力もまた働いているのを見る。

すなわち現在われわれは、これら両者の軸の関係を今一度問いなおす必要がある時代に、われわれの「アイデンティティ」とはそもそも何であるのかを再検討する時代に入ったと言えることができるであろう。そしてこのことを最も端的に示すことのできる契機として、国家の戦争において諸個人の持った視点の分析があると考えられる。戦争に巻き込まれ、遂行協力せざるを得なかった個人にとっての国家と「アイデンティティ」とは何であったのかを明らかに

することによって、右のズレの内容を明確に意識化すること、そしてこのことを今日的な状況における有効な視点として持ちつづけていくことが要請されているのである。

このような問題意識の上に立つて、小論では、哲学者鶴見俊輔の取り上げた、吉田満『戦艦大和ノ最期』^①を素材として、これが提起した問題が現在もなお続いていることを確認しつつ、国家と「アイデンティティ」をめぐる諸問題を考察したいと考える。ただし昨今の状況が、まさしくこの問題をめぐっており、これが今後の決定的な環の一つになり得る予測があるからであり、吉田の作品そのものは、すでに五〇年以上の昔を語ったものであるが、今日のわれわれをなおその射程内に置いているからである。

二

最初に、鶴見に従って、吉田満(一九二三〜七九)について少し述べよう。^②一九二三年(大正十二年)生れの吉田は、東大法学部在学中、一九四三年(昭和十八年)学徒出陣に際して海軍予備学生となり、海軍少尉に任官、戦艦「大和」乗り組みとなった。「大和」は、六八、二〇〇トン、二七ノット、乗組員二、七〇〇名という当時世界最大の軍艦であり、一九四五年(昭和二十年)四月、沖縄への特攻攻撃「天号作戦」により呉軍港から出撃、四月七日に沈没した。吉田は、このとき「大和」の副電測士として乗っており、「大和」撃沈時に救出されて、敗戦直後にほとんど一日で、文語詩『戦艦大和ノ最期』を書いた。戦後、日本銀行監事に在職中病没した。

『戦艦大和ノ最期』の方は、敗戦後の占領軍の検閲制度の下で、一九四六年(昭和二十一年)には、第一稿の発表が全面的に禁止され、その後口語体での発表を経て、ようやく原型のままの形で出版されたのは、平和条約の成立^③占領軍による検閲制度の廃止された一九五二年(昭和二十七年)のことであった。

この吉田の作品について、鶴見は次のように評価する。

「この長編記録叙事詩は、勇敢な青年兵士にふさわしい文体の率直さによって日本文学のひとつの古典として歴史に残るでしょう。その偉大さは、この作品のうち何ら戦後性の痕跡をもとめていないということにあります。戦時軍人の文体によって書かれることを通して、かえって戦争時代の精神をこえ

てこの時代とはちがう別の時代にすんでいる読者たちの心中にまっすぐに訴える力をもっています。そしてこのことは、いかなる時代のいかなる社会においても文学作品というものの普遍性の試金石となるでしょう」^④

そしてこの作品における重要な問題点、クライマックスは、本土出撃後の航海途上の士官たちの白熱した議論の中にあられる。それはこう要約される。「すでに最後の航海に出発したあとで、艦橋で作戦についての議論がなされる。この作戦は、アメリカ空軍に対して最も魅力あるオトリを提供して、なるべく多くの飛行機を自分自身にくぎつけることによって、別部隊の行なう沖縄米軍基地攻撃を成功させることにある。だからこそ、どういふふうにしてかえってくるかはまったくかえりみられていない。燃料も行き道分しかつんでいない。(中略)これが世界海戦史上、空前絶後の特攻作戦となるだろうと評価された。(中略)すでに最後の旅に出してしまっているのに、青年士官たちは日本政府の拘束をはなれてまったく自由に議論しはじめ、必敗論が勝を始めた。この時、だまってきいていた古参の海軍将校・哨戒長の白淵大尉は、さらに徹底した議論をもって新参の学徒将校をおさえた」(四・三二六〜三二七)。

つまり士官たちは、これまで抑えられてきた言論上の統制がとれてしまった状況で、何故自分たちが死ぬのかの目的について議論し、その中で自分たちの死の戦略上の無意味さを認識していった訳であるが、しかしその無意味さの持つ意味が、白淵大尉の発言によって最終的に意味付けられたとする。このことを、吉田自身の文から引こう。

「痛烈ナル必敗論議ヲ傍ラニ、哨戒長白淵大尉(中略)、薄暮ノ洋上ニ眼鏡ヲ向ケシママ低ク囁ク如ク言フ

『進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ 負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ
日本ハ進歩トイウコトヲ輕ンジ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、本
当ノ進歩ヲ忘レテイタ 敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレル
カ 今日覚ズシテイツ救ワレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生
ニサキガケテ散ル マサニ本望ジャナイカ』

彼、白淵大尉ノ持論ニシテ、マタ連日『ガングルーム』ニ沸騰セル死生談議ノ一応ノ結論ナリ 敢テコレニ反駁ヲ加工得ル者ナシ^⑤

鶴見は、この論理について、「軍人としての冷静な計算を徹底させてゆくな

るを得ない。自分たちにこのような作戦を命ずる日本の軍隊の訓練のしかた、その構造、その考え方の根底にまちがいを認めざるを得ない。軍人としての思想を徹底させる果に、白淵大尉のこのような結論が生まれたのだ^⑤と見る。そしてこれを「合流の論理」(同)と名づける。

それは次のようなものである。

「自分たちはこの方角にむかって動く。自分たち以外の諸勢力は自分たちを押しつぶすためにこのように動く。その結果自分たちはこのように屈折して、自分たちの目的を達せずして失敗するであろう。その自分たちの失敗のしかたそのものが、自分たちのプログラムの中にふくまれていて、自分たちが現在表面的にこころざしているよりも高い目的が、自分たちの失敗の上にあらわれてくるであろうと考える」(同)。

このことを日本の十五年戦争にあてはめた場合、それは「大東亜戦争を、アジア・アフリカの植民地解放というよい結果のゆえに肯定するという考え方」(二〇・十二)を批判し、「戦後のアジア・アフリカ諸地域の独立は、日本国家の戦争目的があのようなしかなかったで挫折したことの結果として生み出されたものだ」(同)とする視点となる。そしてまたこの論理は、十五年戦争の指導者たちとその追隨者たちの、「単に目前に新しく生じた結果をつねに正当化する論理(状況追隨の論理)」(二〇・十三・十四)Ⅱ「戦争中は補正行に続けと、名文を書いて、みずからは死地に立たずに青年を死に追いやり、戦後はこの民主主義こそ自分たちの願ってきたものだ、アメリカ占領軍の政策に身をよせる」(二〇・十四)論理を厳しく批判する視点ともなる。われわれはこの視点を現在において生かしていく道を探らねばならぬ、と鶴見は主張する。

三

とはいえ吉田の視点は、鶴見によれば、軍人の反戦行動への転向コースとしてとらえることができる。

というのも戦争開始決定にかかわった最高級の軍人は別として、「軍人一般にとつては、可能なかぎり軍人のルールからそれぬように無用な殺人をさけつつ戦争努力をするという方法か、あるいは最も勇敢かつ無益な仕方死ぬことをとおして軍首脳部の反省を求めるという方法」(四・三三七)が、「軍人勸諭」

から「戦陣訓」の延長上において「軍人の職務意識によってゆるされた数少ない反戦行動への転向コース」(同)として認められるからである。

すなわち吉田においては前記の記述より、後者のコースにおいての戦時下国家主義思想からの目覚めが認められる。しかし同時に、「思想としてはすでに転向しながらも、行動形態においては最もきびしく旧来の軍人としての行動ルールを守ろうとする意識が最後までつらぬく」(四・三二八)という状態に置かれるのが、吉田の状況とされる。それは沈没後の次の個所で示される。

「声涸レテ響キワタル『准士官以上 Hanson 場デ姓名申告、付近ノ兵ヲ握ツテ待機、漂流ノ処置ヲナセ』叫ブアノ横顔ハ清水副砲長カ
——シカリ、ワレハ士官ノ端クレナリ——兵隊ヲ握ル 一人ヲモ多ク収拾シテ次ノ行動ヲ待ツ

何ヲ放心シテイタノカ 今ヲ措イテ責任ヲ果ス時ガアルカ——

声ヲ張り上げ、腕ヲ揮ツテ姓名申告^⑥」

鶴見は、これについて続ける。

「軍艦は沈没し、戦闘は敗北に終り、ここに軍人の世界はなくなったので、新しく生れた海上の無名の世界、海上の共和国の上に兵たちはひとりひとりの才覚をよりどころにして立ちおよぎをしているのだが、青年士官の吉田は、軍人世界の崩壊してしまった無階級の世界においてなお軍人としての本分を守ろうとする。軍人とは、上・下のヒエラルキーの世界だ。混乱の中においてさえこのヒエラルキーの感覚をまもろうとするのだ」(四・三二九)。

この状況は、先ほどの「大和」艦上での白淵大尉の主張に賛意を示した吉田との矛盾を示している。「思想はまず、信念と態度との複合として理解される」(四・十一)とする鶴見の視点からすれば、この状況はまさしく転向である。

「外部世界における旧階層秩序の崩壊を認識しながらも、それと並行して自己の内部世界においてはもはや外の世界と見あうところのない旧来の階層秩序の折り目正しさにしがみついている。この思想形態は、それじしんが、彼の戦時の思想(軍人的外部世界の肯定と軍人的内部世界の肯定)にくらべらるならば、一つの転向である」(四・三二九)。

そして吉田の場合、この分裂・矛盾した意識の状態が、戦後のもう一つの「戦艦大和(日本銀行)」の勤務においても、絶えず問い続けられ、深められる。そしてこの問題は、戦争とそれに対するわれわれのアイデンティティーの問題

として提起される。

四

吉田はこの問いを、「戦後日本に欠落したもの」^⑧と題する論文において提起する。それは、戦争から三十三年後（一九七八年）の不況と円高という内憂外患の状況を踏まえて、次のように述べられる。

「ポツダム宣言受諾によって長い戦争が終り、廃墟と困窮のなかで戦後生活の第一歩を踏み出そうとしたとき、復員兵士も銃後の庶民も、男も女も老いも若きも、戦争にかかわる一切のもの、自分自身を戦争協力にかり立てた根源にある一切のものを、抹殺したいと願った。そう願うのが当然だと思われるほど、戦時下の経験は、いまわしい記憶に満ちていた。

日本人は『戦争の中の自分』を抹殺するこの作業を、見事にやりとげた、といていい。戦後処理と平和への切り換えという難事業がスムーズに運ばれたのは、その一つの成果であった。

しかし、戦争にかかわる一切のものを抹殺しようと焦るあまり、終戦の日を境に、抹殺されてはならないものまで、断ち切られるようになったことも、事実である。断ち切られたのは、戦前から戦中、さらに戦後へと持続する、自分という人間の主体性、日本および日本人が、一貫して負うべき責任への自覚であった。要するに、日本人としてのアイデンティティそのものが、抹殺されたのである」(十五)。

すなわち吉田は、戦中の「アイデンティティ過剰の時代」——それも「粹」のみが強調された、「実体のない、形骸だけのアイデンティティの時代」——への反動から、戦後は、「そういう一切のものに拘束されない、『私』の自由な追求」の時代に移ったとし、「アイデンティティのあること自体が悪の根源である」(十六)と見なされたとする。そして「私」の視点一辺倒から、「おおよそ『公的なもの』のすべて、公的なものへの奉仕、協力、献身は、平和な民主的な生活とは相容れない罪業として、しりぞけられた」(同)と批判する。この姿勢は、昭和三〇年代の高度成長期にはまだ矛盾を生まなかったが、しかし今や「批判されるべきは、みずからのうちに成長率の節度を律するルールを持たない、日本社会の未熟さであり、こうして培われた国と民族の伸長力を、何の目

的に用うべきかの指標を欠いた、視野の狭さ、思想の貧困さ」^⑨「アイデンティティの欠落」である(二二)。

吉田はこのように、戦後日本社会を解明することで、「日本人としてのアイデンティティの確立」を主張し、その有力な手がかりとして、太平洋戦争の原因、経過、結末の客観的分析の必要をあげる。

五

この点に関して、同年八月に吉田と鶴見の間に「『戦後』が失ったもの」^⑩と題する対談がもたれる。そしてここで、吉田が問いかけたアイデンティティの問題が中心的に語られる。

鶴見は、先掲の吉田の論文に関して、「おそらく吉田さんの論文には、日本人の抑止力のなさというか、ブレイキがきかなくなる特性に対する憂慮があるような気がするんですね」^⑪と同意を示しつつ、次のように論評する。

「ただ、吉田さんの論旨とわたしの論旨が違ってくるのはそれから先で、吉田さんが『アイデンティティを失った』とおっしゃるのときのアイデンティティということば、その受けとりかたがわたしとはちよつと違うんだな。アイデンティティというのは精神分析から出てきたことばで、『自分らしさ』ということですね。それがより広く、自分たちの仲間である民族の自分らしさになってゆくわけですけども、その民族文化の自分らしさをよりどころとして、個人の自分らしさをどのようにして確立できるのか、これがアイデンティティという問題を考えたエリクソンの発想の眼目だったと思うんです」(S・七六～七七)。

「吉田さんの場合は、(中略)／むしろ、ちよつと横すべりしてしまって、国家としての同一性という地点に早くもつてゆきすぎているように思われるわけです」(S・七七)。

すなわち鶴見は、吉田の問題意識とは少し異なる「日本人が個人としての自分らしさを失ってしまった点」(同)を指摘し、「民族の習俗のなかに、つよい個人を養い育てるものが求められる。どうすれば、そういうものができるかということ、これが戦後日本のアイデンティティの問題の核心ではないでしょうか」(S・七七～七八)と問いかける。

これに対して吉田は、戦前・戦中にかけての時代の個としての内容の空虚さを踏まえて、「ただ、そのアイデンティティーの内容を充実させるための足場として何かがあるかを考えたとき、わたしは、世界のなかでの日本人としての場というものが、民族の習俗を含めてですが、端的に個を動かす一つの場であると思っただけです」（S・七八）と答える。そして「おっしゃる通りに、太平洋戦争のようなおろかな破局に追い込まれていったのは、結局、指導者の側にも国民の側にも抑制力がなかったからで、アイデンティティーの確立こそがブレーキをきかせる決め手であったということでしょう」（S・七八～七九）と、アイデンティティーの確立を、抑制力、ブレーキを契機として見る視点を示す。この点について鶴見は、明治以後の歴史を振り返って、「明治三八年（一九〇五）の日露戦争を負けないで切り抜けたときに、日本の国家の指導者に大きな転換があった」（S・八二～八三）と指摘する。すなわちロシアとの戦争の終結時において、児玉源太郎（陸軍参謀総長）と小村寿太郎（外相）のコンビが見せた戦争収拾のやり方を評価して、次のように述べる。

「あのときに、児玉源太郎と小村寿太郎は、ナポレオンもヒトラーもできなかったことを成しとげたんです。（中略）あのときにいい気になってブレーキを踏まずにいたならば、大負けに負けてたいへんなことになっていただしよう。指導者側があれだけの抑止力を働かせることができ、また、国民の側でも、日比谷焼き討ちなどで不満をあらわしたにせよ、とにかく自分を抑えることができた。あの相互の抑止力のきかせかたというのは、すばらしいものだと思うんです」（S・八三）。

ところが、この相互のブレーキが、明治三八年以降になると途切れてしまった、というのが鶴見の主張である。すなわち「名誉や利益についての欲望に抑えがきかなくなり、そういう指導者の姿勢が大正時代の青島出兵につながっていく。昭和の初めになるともう無茶苦茶で、理性的に考えたら負けるに決まっている戦争まで敢行してしまう」（同）「ブレーキなしの桃太郎主義」（同）とその破局にまで到る。そして重要なことは、この傾向が、敗戦によっても変わらなかったということである。すなわち戦後に関して鶴見は、「敗戦後、マッカーサーが勝利者の寛大さでいい気になって作った『新憲法』を、何ら疑うことなく国家目標として邁進し、今日の隆盛をきたした。明治三八年以降にできた『型』を敗戦後ももちつづけたということ」（S・八四）を指摘する。

これについて吉田も、「昭和三十年（一九五五）代から四十年代にかけての日本経済の高度成長は、戦争に勝った状態と同じですね。ドイツは日本より先に経済成長したけれど、ギリギリのところではブレーキをかけていた。日本の場合は、かなり痛い目にあわないとブレーキがかからない。その後さまざまなショックで痛い目にあっている、ようやく少し反省するようになったということでしょう」（S・八七）と贅意を示す。

そして抑止力、ブレーキを示すものとして鶴見は、個人の確立の姿としての「自足の人になること」（S・八一）と、これを保障する環境としての「村」の再評価（S・九三）——「明治以前からの日本の村の伝統」（S・九五）の尊重——を提起する。前者は、換言すれば、「立身出世とか、他人の出世に対する妬み心とかにまったく関係なく平然としている人」（S・八一）であり、歴史に見ればこの視点を日本という国に当てはめた人物として、石橋湛山があげられる。鶴見によれば、石橋は、「いまの抑止力の問題にしても、『小日本』という考え方をとり、中国へ出てゆく考え方はとらない。青島出兵には反対なんです。つまり、国内改革で景気をよくするためにさまざまな事業を興す。そういう方向にすすんでいる。日本国内に自足の人が生まれ出るような普通人の文化を高めようと、その立場から文芸評論を書いています」（S・八九）と評価され、この視点が戦後も顧みられず、戦争中の自分の責任についての反省が（右翼のみならず左翼の側にも）なされずに、「敗戦直後の戦争責任追及の問題が、右翼と左翼の区別の問題にすりかえられてしまった」（S・九一）ことが、抑止力を弱めている原因となったとされる。

後者の「村」の再評価については、この場所がむしろ日本人の個の確立にとって重要であったことを再認識する必要があるとされる。すなわち日本の村の場合には、例えば水利の慣行等を寄り合って決めることが非常に多い。あるいは「日本の村では殲滅戦をしないんですね。あいつはわるいやつだと言って、（中略）ジリジリといやがらせはするんですけど、ブツ殺してしまうまでの思想的な差別とかはしない」（S・九六）ということがある。そしてそのような習慣が個人をつくってきた。このことは、普遍宗教の受け入れ方にも示されている。これについて鶴見は、こう語る。

「日本の場合には、普遍宗教は儒教とか仏教というかたちで入り、キリスト教もほんのちよっとあるけれど、その受け止めかたが、村のふつうのしきたり

本位で受け止めていたと思うんですよ。仏教や儒教は、それにあるていど飾りとしてつけ加えられたんですね。普遍的な教えはじゅうぶんもっているが、自身自身が普遍者だという思い上がりがない——村の思想で普遍思想と受け止めている。それが日本の大衆思想のいい面で、それこそもう、アイデンティティなんだなあ」(S・九七)。

ところが「日本では、宗教をあるていどの飾りとして受け入れることのできた村の思想が、明治以後崩れていって、しまいは万邦無比の『国体』思想になってしまった。それは、かたちは日本古来のものだけれど、中身はキリスト教、十字軍の戦争と同じですよ。(中略)その万邦無比の国体を朝鮮、台湾からはじめてアジア各地に輸出しはじめた」(S・九七～九八)。

鶴見は、このように語ることで、「村」のアイデンティティ、「民族文化」のアイデンティティをとりもどすことよって、個人のアイデンティティが確立していく方向を探る。これは、一種の保守主義としても成立する可能性を持っているが、また現実の国家、政府を批判していく視点を明確に持つことになる。

以上の議論をまとめて、鶴見は、アイデンティティの問題について、こう述べる。

「わたしは、個人のよって立つ民族の伝統というものがまずあって、その次に国家の問題が来ると思うんです。そしてその次に政府が来るわけですけども、日本では国という、いまの政府というふうに短絡して、いまの政府を無条件で支持するところまでいってしまふ。そうではない生きかたが出てこない、アジアとの連帯などもむずかしいですね。

逆に個人をたいせつにするという気風が生まれて初めて、アジア諸国に対しても個人と個人の交流が生まれ、民族と民族の交流となって、それがおのずから日本という国の評価も変えてゆくことになると思う」(S・九九～一〇〇)。

この、現存の国家、政府を超えるアイデンティティを提唱していく視点は、個人のレベルでの問題が、民族のレベルでの問題とつながり得る可能性を持つものであり、今日特に検討されねばならないであろう。鶴見は、吉田との対談の中で、戦後の日本にとっての重要事を右のように説明する。

六

鶴見と吉田との対談に対して、二ヶ月後に、粕谷一希が、「戦後史の争点について——鶴見俊輔氏への手紙」^⑩と題する論文を掲載し、主には鶴見の提起したアイデンティティの問題についての疑問・批判を提出する。

粕谷の問題意識は、次の点から出発する。

「敗戦によって日本は生れ変わったはずだった。単純化すれば、戦後の歩みは、明治以降の『富国強兵』路線を捨てて、『富国』の道を歩んできた。けれども路線の違いこそあれ、日本人の体質はあまり変わっていなかったのではないか。かつての日本が『列強に伍して』軍事大国を実現したとき、すでに破局への萌芽を宿していたように『世界の先進国に伍して』経済大国を実現したとき、(中略)新しい破局の萌芽をすでに宿しているのではないか」(S・一〇四)。

すなわち戦前に軍人の独走を許した日本人は、戦後、経済人の独走を許してしまひ、これを批判するべき知識人も有効性を欠いたままの批判しかなし得ていない現状がある。

このような状況を見るならば、「敗戦のとき、トータルな自己批判として出発したはずの戦後の出発にどこか視点の欠落があったのではないか」(S・一〇五)という疑問が出てくる、というのが粕谷の主張である。

この視点から戦中・戦後についての事態を、粕谷は次のように述べる。
「太平洋戦争はたしかに帝国主義戦争の面をもっていました。またそれは軍国主義支配の一環としての戦争であったことも事実です。けれどもまた、明治維新によって成立した近代国民国家・近代主権国家の延長としての戦争でした。国民は徴兵制の下にあり、国家は交戦権をもっていました。(中略)祖国存亡の危機に際して、国民がとくに青年達が身命を賭したのは、軍国主義のためでもなく帝国主義のためでもなく、共同体としての民族のための死ではなかったでしょうか」(S・一〇九)。

そしてこれは、多くの人々・青年が『国のために死ぬ』ことを選び、「それは戦争に積極的な意義を認めた人々だけでなく、懐疑的な人々、批判的な人々の大多数も、義務として国のために死んでいった」(S・一〇六)という事実をどう評価するかという問題となる。粕谷はこれについて、「この『国のために死ぬ』行為に、一定の道義的評価を与えなかったところに、戦後日本の出発点で

の過誤があったようにおもわれます」(S・一〇七)としてこう続ける。

「戦争のために死んだ二百五十万の死者たちを祭ることが、その死の意味をもう少し掘り下げて考えてゆくことが、日本人の共同の行為としてあってよかつたと思います。

戦争に批判的たりえなかつた人々は、戦後になって「先見の明」のあつた人々から多くを教わりました。逆に「先見の明」ある人々は、自らの解放感を抑制して「国民国家の論理」に殉じた人々の道義的意義を限定的にもせよ評価して進んで葬儀に参列することが必要ではなかつたか。戦後日本の進歩思想が一定以上の影響力をもてず、日本人の心理に深い亀裂をつくつていった第一歩は、ここにあるように思われます」(S・一一〇)。

粕谷はこのように、敗戦後の出発点での欠落について、先述の吉田の主張と相通じるものを提起する。そして戦後日本人の意識の特徴として、①「生活目標として『私』の追究が優先したこと」(S・一一二)を評価しつつも、それが個人レベルのみならず、集団レベルにまで優先されていること、②また国家主義への反動・反省から、国家もしくは権力自体をも否定しがちな傾向(国家よりも社会、という論理)を持つことを指摘し、「けれどもそうした自由と多様性・多元性を制度的に保証するのも国家なのではないでしょうか」、「新聞・雑誌に氾濫する『反体制』『反権力』という言葉は、国家を不可触(アンタッチャブル)な存在悪と見なし、それへの抵抗がおのずから社会正義の実現となるような錯覚を与えています」(S・一一三)と反論批判する。

つまりここには、戦後の風潮に対する疑問を、国家・国民を軸にしてとらえるという粕谷の姿勢が、戦後日本の進歩思想の最終的な到達概念であるとされる普遍的市民に対して、個別的国民というかたちで示されている。そしてこの姿勢が、保守主義なりに一定の支持・説得力を有していることもまた事実であろう。

七

粕谷からの批判に対して、鶴見は、翌年の二月に「戦後の次の世代が見失つたもの——粕谷一希氏に答える」^⑩で立場を明らかにする。この中で鶴見は、「吉田氏と私との対談の争点は、『アイデンティティ』という言葉の使い方の

ちがいをいとぐちとしますけれども、それはひとつのいとぐちにすぎず、それをおして、私がつきりさせたかつたのは、国家批判の根拠は何かという問題です」(S・一二三)と述べて、問題の核心がまさにここにあることを示す。

すなわち吉田の『戦艦大和ノ最期』で語られた白淵大尉の記録は、自分たちの無益な死を通して、国家批判を後世に委ねるものであるが、その根拠として鶴見は、アイデンティティの問題に関連して、「この場合、日本民族の自己同一性が、そのまま、日本国家の自己同一性ではないということ(両者は関連はありますが)、それをつよく主張したいのです。さらに、日本民族の自己同一性は、そのまま現政府の自己同一性ではないということもはっきりおぼえておきたいことです。その区別の中に、日本国家批判、日本政府批判の根拠があります」(S・一二三～一二四)と述べて、粕谷の批判の視点とは異なる視点を出す。そしてこのことは、吉田との対談のテーマとなつた事柄と通じているとされる。

「私が、吉田氏の著作をはじめ読んでからこの人にたいして敬意をもちつづけながら、日本の現在についての診断として書かれた『戦後日本に欠落したもの』に、いくばくかの不満をもつたのは、戦争把握の深さにもかかわらず、なおも国家批判の権利を保つところがはっきりしていないということを感じたからです」(S・一二七～一二八)。

こう鶴見は、吉田についての感想を述べて、国家批判・権力批判の礎を、「それは具体的には、現政府がきめてしまったことを、根本から批判する力をどのようにして私たちは自分の中につくることができるか、という問題」(S・一二五)の考察に見ようとす。

そしてその礎として提出されるのが、「市民」あるいは「住民」である。鶴見によれば、「もともと、私、あるいは私ときあいのあるこの土地の誰かれ(これが、私の考える意味での市民です、住民といったほうがよいかもしれませんが)が現実性のない観念で、政府のほうが現実性のある観念だという考え方には、うきあがったところがあります」(S・一二四)とされ、政府にかかわる「国民」よりも、もっと身近な「自分と自分がここに住んでいる仲間」(S・一二五)から出なおしていくこと、従つて「そういう自分たちを、ある局面では守り、ある局面では圧迫するものとして国家があり、それに対するさまざまな工夫をしていくこと」(同)が重要であると見なされる。この「市民」、「住

民」は、国家という枠の中の均質な構成分子である国民の観念とは同じものにならない。しかしこの発想にはまた、「地域が世界にむすびつくという、逆説的な構造」(S・一二四)——それは自分のともに住んでいる仲間を、ナチュラルに人類の一員として見る視点である——があり、この見方がわれわれに自然に備わっているとされる。ここからすれば、国家・国民をもとにしてそこから考えるというのとはまた異なる方向が出てくる。鶴見の言い方を借りれば、「土地の文化から世界の文化にむかう、この動きは、私たちの日常生活のリズムの中にあります。それは、世界国家という架空のわくの中で考える種類のコスモポリタニズムと向きあうもう一つのコスモポリタニズムの芽です」(S・一二四～一二五)ということになる。

鶴見は、このように粕谷の批判に対して、「国民」とは異なる「市民」「住民」の視点からの国家批判・権力批判の眼を打ち出すが、粕谷が、自らの政治的保守主義を踏まえた上での主張——「政府を批判し場合によっては倒すこと、さらに体制としての国家を変革することの正当性を確認しながら、他方で民族共同体としての国家の、同一性、持続性を確認しながら、論議は展開されるべきでしょう」(S・一二八)——には賛意を示し、この立場を堅持するようすすめる。

しかし同時に鶴見は、転向史の共同研究の結果から、「そのような保守主義が、明治・大正・昭和を通じて、きわめて薄い層としてしかなかった」(S・一二二)事実を指摘し、「保守主義がそのまま現政府への無条件の追随になってゆくであろう」(同)と推測する。これは日本においてそのような保守主義が育つてこなかったし、現在も「弾力性のある保守主義」(S・一二三)が育っていないという状況での鶴見の見通しであり、思想を完成した完全なものとしては見なさない視点の再確認であると言えよう。

八

さて以上のような「日本のアイデンティティ」問題に端を発して、国家批判・権力批判へと発展した鶴見を中心とする論争は、一九七九年七月の鶴見と司馬遼太郎との対談『敗戦体験』から遺すもの^⑫で、以前よりも幅を持った日本人の展望へと移っていく。

ここで鶴見は、レッドフィールドの「期待の次元と回顧の次元」^⑬を援用する。それによれば、「いま生きている人は、こうなるだろう、こうすればあなるだろうと期待をもって歴史を生きてゆく」(同)次元(期待の次元)と、「ある時点まで来て、こんどふり返るときは、もう決まっているものを見るわけだから、すじが見えてしまう」(同)次元(回顧の次元)とがある。そしてこの両者を混同してはいけないのであるが、敗戦のときの言論の指導者にはそれがあつたとされる。すなわち「自分はこういう気持ちで十五年間戦争をしてきたのか、自分がまちがえたときの期待の次元をもう一度自分のなかで復刻し、それを保守すべきだったのに、そのときに、占領軍の威を着て、嵩にかかってまちがった戦争だったと回顧の次元だけで、あの戦争を見た」(同)ということであり、さらに言えば、「いまをポイントにして、『戦後の進歩的文化人はなんだ!』とか、『戦後文学は全部虚妄だ』とか言うのは、わたしも片足を突っ込んでいた敗戦直後の進歩的文化人の流儀を、ほぼ無修正で復活させることだと思う。論理の型として同じことですよ」(K・八九)という批判になる。

そして鶴見は、これを超えるような、リアリズムの「本格的な保守主義」を要求する。この「保守とは、自分がいまままで期待の次元で生きていた状態から手を放さずに、ちゃんとつかむことからはじまる」(同)のであり、進歩派批判にのみ終始している「保守派」ではなく、「日本が国家として、国民として寄りかかるとする思想の共通の河床」(K・八六～八七)を提示することであるとす。ここには、思想の一面性に対する明確な区別の視点があり、左右いずれもの支配的主流の思想に対して距離を置きつつも評価していこうとする姿勢がある。

この日本社会のリアリズムの欠如について、鶴見の、明治三八年(一九〇五年)以来という説を踏まえて、対談者の司馬は、次のように述べる。

「日露戦争が終わったときに、陸軍少将は全部男爵になった。戦史の編纂は歴史家に委嘱するのがふつうですが、日露戦争史は軍人が書いています。すべての軍人が論功行賞の対象になってしまうものだから、結局は何の価値もない官修戦史ができあがってしまった。そこから日本のリアリズムがガタツと減った」(K・八五)。

そしてその後、石油が軍事的に決定的な戦略物資となった時代について、「机上論で言えば、もう日本は近代的な軍隊をもつ資格はなくなった、いっそ軍隊

を廃止してしまおう、という方向に向いてもかまわない。が、軍人たちの職業的危機意識は逆に政治や国民思想をのっとってしまうことに向かった。自分たちは存在理由がないことを内々感じたときに逆にファナティック（狂信的）になったわけで、こういう政治の精神病理というものが、昭和初期を支配したと思います」（同）と続ける。

司馬は、「その点から言うと、シベリア出兵あたりから敗戦までの日本の異常さは、われわれがものを考える上でのまともな思考の叩き台にならない」（同）として、鶴見のいう「岩床」について、「岩床を探さねば、日本の政治的正義というのがくりかえしうすべりしてゆくことになります」（K・八七）と賛意を示す。

かくしてここに「日本のアイデンティティ」の問題が再度提出されることになるが、この「岩床」は、鶴見にとっても拠って立つことのできる、「反革命」に対して闘うことのできる砦となる。

それを自由主義と呼ぶならば、「その自由主義は、反々革命のかぎりにおいては、革命はいいと思う」（K・九二）自由主義であり、先述の「柔軟性のある保守主義」、リアリズムと通じるものである。

そしてこの「岩床」として、日本的な精神的伝統として焦点を合わせられるのが、明治政府によって作られた国家神道以前に存在していた「非国家神道」である。これは、「神道」という名称が付くにせよ、村に土着の伝統・習慣に近いものであるとされる。そのいくつかの特徴を、鶴見はこう語る。

「非国家神道の一つの特色は、『思想？ フーン、そんなもの・・・』という、思想嫌いにあるんです。その思想を重く見ないという思想が岩床に近いんじゃないかな。たとえば、国体明徴とか目をつり上げないで、『人柄がいいなら、マルクス主義者でも何でもいいじゃないか』というようにして助けてくれるひとがいるでしょう。（中略）あれが非国家神道だと思いますね」（K・九七）。

「日本の村では、違う宗教や思想をもっているからといって、肉体的に殲滅はしない。それが村の伝統なんです。これは非国家神道とひじょうによく似ている。重大なのは人間であり、生きていくためには互いに闇討ちはしないという約束を暗黙のうちに交わす。それが非国家神道の源じゃないのかな」（K・九七～九八）。

そして鶴見は、このような私たちの思想が、実は自分の立場ではなかったか

と確認する。

これに関連して司馬も、同様の受け取り方を次のように示す。

「わたしは、近畿地方の漁村へ、ここ十年ばかり、暇があれば行っているんです。このあいだ行った淡路島の小さな村でも、八幡様が氏神として小山の上に祭ってある。漁村だから浜辺には、海の神である住吉さんと恵比寿様が祭つてある。それだけでは効き目が薄いとみえて、金毘羅さんまで祭つてある。金毘羅の思想がどうのこうのというのではなく、住吉よりも効き目が高そうだということにすぎないんです。いわば金毘羅ビタミン剤ですね。あくまでも人間が中心にいる」（K・九八）。

このことは鶴見の、「神道ということばができる前の、そしていまもわれわれがもっている『神の道』」（同）と言えるものであり、司馬の指摘では「たとえば、山のなかを歩いていて、ちよつと気味がわるく、何か皮膚感覚に来るなというところには、必ずといっていいほど祠がありますね」（同）という感覚によって裏付けられているような、人間の日常感覚、村の日常生活の意識である。

この「非国家神道」なり感覚なりを再び見出すことが、「日本のアイデンティティ」につながる、というよりも、アイデンティティそのものであるというのが鶴見の主張である。ところがこれを、前近代的、非科学的であるとして打ち捨てて、否定してしまう社会のあり方が日本ではまかり通ってきた。その結果が、リアリズムを欠いた国家・国民の進路となって破滅に導いたというわけである。それ故に、「初めにきわめて具体的ななかたちをした、それでいてあまり醇化されていない、あらがねの状態の普遍命題を出す」（K・九九）という日本の伝統の再発見こそが重要となる。

この点について司馬も、キリスト教との比較で、次のように述べる。

「わたしもそう思いますね。キリスト教について言いますと、神というフィクションを証明するために、重厚な神学ができたのであり、やがてそれが哲学を生んだんですね。ところが日本の場合、谷のちよつとしたところを、自分に祟るんじゃないかと思う人が清めることによって、宗教が生まれた。清めるだけでじゅうぶんに自足してしまう」（同）。

はからずもここで「自足」という言葉が出されてきたが、まさしくこの「自足」の意味で「日本のアイデンティティ」の礎が説かれている。

鶴見・司馬の対談は、この後、人口の停滞をめぐる問題から、「停頓＝停滯

の思想」へと移っていくが、進歩がすべてという風潮に反対するこの思想もまた、ある種の保守の契機としてとらえられている。

このように鶴見は、司馬との対談において、「日本のアイデンティティー」をめぐる問題を近代社会の以前であり基礎であるものに、その根拠を求めるところで、吉田の問題提起に応えようとしたのである。^④

九

以上のように鶴見にとっては、「日本のアイデンティティー」の問題は、民族・国家・政府の三層において検討されるべきものであって、この国家批判・政府批判の根拠が存在するとされる。またアイデンティティーの問題は、個の立場よりする抵抗の問題としても提起され、われわれ自身の視点のかわり方としても考察されるべき性格を有している。鶴見の場合、このことは、「期待の次元」と「回顧の次元」の区別とともに、後者によって一切を判断するのではなく、前者の生きていた状態から手を放さずに考えていくこととして提示される。そしてこれを堅守することによって、先述の白淵大尉の発言の論理である「合流の論理」が、戦後、現代の日本社会に生かせる道が開けてくるとする。これは、その視点から、現国家・現政府の実施する政策に異議を唱える権利である。

そしてこの権利の根拠を、鶴見は、現国家を超えた、それ以前の『村』の伝統』の日常生活の中に見る。鶴見はこれを「非国家神道」と名づけるが、要するにこれは日常生活の感覚であり、その確かさに依拠するものである。この中に生きる抑止力を備えた「自足の人」こそが個の確立であり、これが現代社会の戦争の方向（「ブレイキなき桃太郎主義」）をとどめるために必要とされているとする。

それ故この視点からすれば、現代社会を一色に塗りつぶしてしまう国家・国民という立場にも、これを翼賛する思想にも、またこれに対抗して反国家権力闘争を煽る思想にも、異議を申し立てるものとなる。というのも鶴見自身は、リアリズム的な「柔軟性をもった保守主義」（自由主義）を標榜し、国家体制の打倒を目ざす「革命」に反対する、いわゆる「保守派」の「反革命」に反対する「反々革命」という、複雑な立場に立つものであるが、ここからすれば、

現代社会の思想の主潮流のいずれもが、『村』の論理』と「自足の人」を礎とする「非国家神道」とは相容れないものとなるからである。この意味で鶴見の思想は、左右どちらにも距離を置きつつも、国家批判・権力批判のラディカルな視点を忘れぬ立場であり、これは、ともすれば「アイマイさ」を含むものが見なされがちな立場であるが、批判の一つの視点として、絶えず自分の依って立つ「岩床」にもどって、位置を確かめつつ行動する個人の姿勢となる。そしてまた近代社会の行き過ぎ、極端さ、一面性を戒める立場を忘れぬことは、現実に有効性を持つと考えられる。

ただその極端を嫌う思想が、現実に有効性を持つためには、『村』の伝統』「自足の人」に根を張った「非国家神道」の伝統と積み重ねによる厚い層が前提とされねばならないが、この層の形成が歴史的に、国家批判・権力批判へと向かわずに、逆に国家によって吸収されて、その支持層となっていくたという事実経過をどう総括していくかが今後の課題として残されている。このことは、鶴見の立場の有効性、意義とその限界を明らかにしていくことと密接に結びついている。ただし、鶴見によって提起・行動された視点の戦後民主主義への貢献には、やはり大なるものがあり、この視点を現在において受け継ぎ発展させていくのもまたわれわれの側の課題であろう。

補論

上述の「日本のアイデンティティー」と国家をめぐる論争と関連して、これを国家の方向に収斂しようとする一人に加藤典洋がいる。加藤の主張は、『敗戦後論』^⑤に端的に示されているが、その内容は次のようなものである。

加藤は、戦後日本の社会が、人格的に二つに分裂しており、「改憲派と護憲派、保守と革新という対立をささえているのは、いわばジキル氏とハイド氏といったそれぞれ分裂した人格の片われの表現態にほかならない」（四七）とする。そしてこの分裂の一方の担い手たち、「いままたとえば、日本の護憲派、平和主義者は、戦争の死者を弔うという時、まず戦争で死んだ『無辜の死者』を先に立てる」（五二）。その自身は、肉親であり、原爆などの死者であり、二十万のアジアの死者であり、彼らを弔うことが第一とされる。これがジキル氏の「正史」の姿勢である。しかしそこには、「三百万の自国の死者、特に兵士とし

て逝った死者たち」(五五)は、「侵略された国々の人民にとって悪辣な侵略者にほかならない」(同)と見なされるので、確たる位置を与えられないで「見殺し」にされる。

「ここで三百万の死者はいわば日陰者の位置におかれるので、あの靖国問題には、このことの正確な陰画、この『空白』を埋めるべく三百万の死者を『清い存在(英霊)』として弔おうという内向きの自己」、ハイド氏の企てなのである」(五六)。

加藤は、戦後問題の分裂とそれに伴う「ねじれ」の感覚をこのように分析して、次のように主張する。

「両者に欠けているのは、これらの死者は『汚れている』、しかし、この自分たちの死者を、自分たちは深く弔う、と外に向かっている、内に向かっている、これまでにない新しい死者への態度であり、またその新たな死者の弔い方を編み出さなければ、ここにさしだされている未知の課題には答えられない」(五七)。

そしてここからの分裂を超える道を、前述の『戦艦大和ノ最期』での白淵大尉の発言に見出す。

「この大尉に吉田は一度、部下に優柔不断な態度を見せた時、間髪を入れず、殴られたことがあった。白淵はこの時二十一歳、兵学校出身の根っからの軍人である。

ところで、たとえ一人であれ、わたし達がこのような死者をもっていることは、わたし達にとって、一つの啓示ではないだろうか。死者は顔をもたなければならぬが、ここにいるのは、どれほど自分たちが愚かしく、無意味な死を死ぬかを知りつつ、むしろそのことに意味を認めて、死んでいった一人の死者だからである」(五八)。

すなわち加藤は、「戦争の死者を、あの吉田満の『戦艦大和ノ最期』の白淵大尉が示唆するように、無意味であるが故に、その無意味さゆえに、深く哀悼すること」(一〇五)が、あの分裂、「ねじれ」を克服し「日本のアイデンティティー」にいたる道であることを強調する。そして「その自国の死者への深い哀悼が、たとえばわたし達を二千万のアジアの死者の前に立たせる」(七五)のことであり、このことがなされないままにされてきたことが、分裂、「ねじれ」を生み出してきたとする。

加藤のいう「悪い戦争にかり出されて死んだ死者を、無意味のまま、深く哀悼する」(同)という主張は、しかしながら、実際問題として「二千万のアジアの他者たる死者」(一〇五)の哀悼への「踏み板(スタートライン)」(一〇六)になるのかどうかは疑問とせざるを得ない。すでに論じてきたように、「日本のアイデンティティー」に層差があり、これについての明確な分析が必要であるにもかかわらず、加藤はこれを無視して議論を進めることにより、結果として国家に優位を持つアイデンティティーに接近していく恐れがあるからである。さらに加藤は、白淵大尉の発言そのものを恣意的に解釈している側面がある。

これについて、例えば、徐京植は、白淵大尉の発言を繰り返して三百万の無意味な死を無意味のままに厚く弔うという加藤の主張を、次のように批判している。

「これは危ういと思います。白淵大尉は、全く無意味に天皇帝国家、軍国主義日本の犠牲とされていくことにもがき苦しむように、このような議論を組み立てた、と私は思います。『きけ わだつみのこえ』の兵士たちと同じです。国家によって強制される死が避けられない以上、そこに何とかして意味付与をしたいというものがきです。

しかし白淵大尉や『きけ わだつみのこえ』の兵士の死は、ついに、彼らが無意味な死へ追いやった天皇帝国家を否定する方向へは向かわず、逆に『散華』の美学となって日本国家に回収されました。いま、国民主体をたて直す必要を力説する加藤さんは、白淵大尉を例に引いて自説を補強しようとしています、まさにその点に、国家へと回収されようとする彼自身の危うい傾きが露わになっています」^⑧。

以上のように、「日本のアイデンティティー」をめぐる議論は、戦争責任、戦後社会、ナシヨナリズムの問題と深く絡みあって、現代的問題として継続提起されており、今後稿を改めて論じなければならぬ。そしてその場合にも、鶴見の出した視点の有効性については、絶えず検証していかなければならないであろう。

註

- ① 吉田満『戦艦大和ノ最期』（講談社文芸文庫、一九九四年）
- ② 以下の内容については、『転向研究』鶴見俊輔集、第四卷（筑摩書房、一九九一年）、三二四～三二五ページによる。以下本書からの引用は、（四・三二四～三二五）等と表記する。
- ③ 『現代日本思想史』鶴見俊輔集、第五卷（筑摩書房、一九九一年）、一二八ページ。以下本書からの引用は、（五・一二八）等と表記する。
- ④ 吉田、前掲書、四六ページ。
- ⑤ 『日常生活の思想』鶴見俊輔集、第一〇卷（筑摩書房、一九九二年）、十三ページ。以下本書からの引用は、（二〇・一三）等と表記する。
- ⑥ 吉田、前掲書、一三四ページ。
- ⑦ 吉田『戦中派の死生観』（文芸春秋、一九八〇年）所収。初出は、『季刊中央公論・経営問題』（一九七八年、春季号）。以下本書からの引用は、ページ数のみを表記する。
- ⑧ 鶴見俊輔座談『戦争とは何だろうか』（晶文社、一九九六年）所収。（初出は、『諸君！』一九七八年八月号）
- ⑨ 同上、七六ページ。以下本書からの引用は、（S・七六）等と表記する。
- ⑩ 同上に所収。（初出は、『諸君！』一九七八年一〇月号）。以下の引用は、同上による。
- ⑪ 同上に所収。（初出は、『諸君！』一九七九年二月号）。以下の引用は、同上による。
- ⑫ 鶴見俊輔座談『国境とは何だろうか』（晶文社、一九九六年）所収。（初出は、『諸君！』一九七九年七月号）
- ⑬ 同上、八七ページ。以下本書からの引用は、（K・八七）等と表記する。
- ⑭ なおこの対談について吉田は、この後「死者の身代わりの世代」（吉田、前掲書所収。初出は、『諸君！』一九七九年十一月号）を遺しているが、その中で吉田は、主として鶴見の、現政府を根本から批判する力を自分の中に作り出し、国家の失敗をあともしりする先例をはっきり残すという主張に賛同しつつ、そのあともしりの主体である市民の責任においての代替物の提供の必要を説く。また司馬については、敗戦と「日本のアイデンティティ」の

問題で、次のような疑問を發する。

「司馬氏は鶴見氏との対談の仲で、——戦後の日本は、経済大国とか言われてますが、他の国に影響を与えるほどの思想を持っていない。もしあるとすれば、『私どもは思想なしで、なんとか東京も比較的犯罪件数もすくなくすごしています』ということでしょうか——と、さりげなく語っておられる。日本民族の本質をめぐって、数々の長大作をものにされた氏が、明治維新に劣らぬ大変革であった敗戦の経験について、この程度の感想で片付けられるのは腑に落ちないように思われるが、いかがであろうか」（吉田、前掲書、二〇～二二ページ）。

⑮ 加藤典洋『敗戦後論』（講談社、一九九七年）。以下本書からの引用は、ページ数のみを表記する。

⑯ 徐京殖『分断を生きる——「在日」を超えて』（影書房、一九九七年）、一九一ページ。